

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

January 1  
2021

今、見ておきたい常滑市役所



重要無形文化財(人間国宝)保持者  
工業技術の師(勲章)  
常滑焼(急須)  
故山田 稔(三代 山田常山)  
大正15年10月1日生  
山田氏は、常滑焼の急須を造ることに専念し、  
その技術は、山田氏の没後、山田氏の次男である山田常山に  
継承された。

山田 常山  
大正15年10月1日生  
山田氏は、常滑焼の急須を造ることに専念し、  
その技術は、山田氏の没後、山田氏の次男である山田常山に  
継承された。

常滑焼の急須を造ることに専念し、その技術は、山田氏の没後、山田氏の次男である山田常山に継承された。

# 今、見ておきたい 常滑市役所

令和4年1月に移転を予定している常滑市役所。  
新庁舎への期待は高まるが、  
長きにわたり市民に親しまれてきた現庁舎にも  
ねぎら 労いの言葉をかけてあげたい。  
常滑らしさがたくさん詰まった  
現庁舎の歩みと見どころを紹介しよう。



### 新庁舎建設に至るまで

令和4年(2022)1月のオープンに向けて、常滑市役所新庁舎の建設工事が今、急ピッチで進められている。

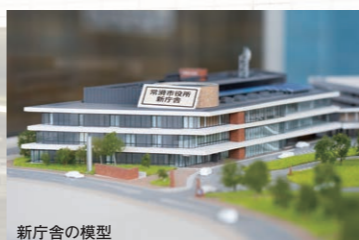
新庁舎ができるのは、セントレアライン常滑インターの近くに広がる飛香台。平成27年(2015)5月に開院した常滑市民病院に隣接して建設される。計画策定にあたっては市民会議を開催して市民からの意見を取り入れ、利用頻度の高い窓口のワンフロア集約、閉庁日も利用できることも図書室や市民ギャラリーの設置など、使いやすく親しみやすい施設になるよう工夫が凝らされた。もちろん環境面や防災面にも最大限の配慮がなされている。

新庁舎に移転することになったのは、現庁舎の老朽化と耐震性不足が理由である。現庁舎が竣工してすでに五十年超。これまで大規模な改修は行われておらず、建物や施設の劣化が著しいうえ、愛知県の市庁舎で唯一、耐震性能を満たしていないという難点があった。最初の耐震診断が実施されたのは平成16年(2004)とずいぶん前だが、市の財政状況が厳しいなか、小中学校の耐震補強と病院・消防署の移転を優先させたため、なかなか市庁舎の対策に着手できなかったという事情がある。

平成27年(2015)に二度目の耐震診断が実施され、耐用年数は残り二十年との判定が出されると、いよいよ対策が喫緊の課題となった。そこで市は、現庁舎の耐震改修計画を進めることにしたのだが、翌年、熊本地震と鳥取県中部地震が発生したことで方針の見直しを迫られる。というのは、被災地の市庁舎を調査したところ、被災後の業務継続が非常に難しいことや、耐震補強した建物ですら大きな被害を受けたことが判明したのだ。

ところが、それに対応するため改修計画を見直してみると、約二十億円という当初の想定を上回る莫大な事業費が必要となることが明らかになった。ならば、改修ではなく建て替えという選択肢も浮上してくる。

そこで開催されたのが「市庁舎の今後のあり方を考える市民会議」だ。これは、市庁舎の耐震対策をどうするべきかを、行政だけでなく市民も一緒に考えていこうと設けられた場である。ここでは耐震だけでなく「そもそも市庁舎はどういう存在であるべきか」ということまで検討された。併せて庁舎で働く市職員のワークシヨップも実施され、それらの結果として、飛香台への移転が決定したのである。



新庁舎の模型

### 威容を誇る庁舎が埋立地に出現

移転先の飛香台は、平成後半に整備が進んだ新興住宅地である。海岸からおよそ一・五キロ離れた内陸の丘陵地であり、津波の心配はない。長い海岸線を持つ常滑市の中では比較的安全な場所である。万が一の災害時に復旧・復興拠点になることを見越してのものである。

では、現庁舎が建つ「新開町四丁目」はどんな場所なのだろうか。

かつてここは海だった。昭和27年(1952)から昭和32年(1957)にかけて埋め立てが行われ、当時の常滑の勢いを象徴するかのような広い土地が造成された。宅地として分譲される一方で公共施設の適地としても注目され、昭和34年(1959)に皮切りとなる常滑市民病院が開院。続いて昭和40年(1965)に消防本部、その翌年に市民体育会館が開館。そして昭和44年(1969)8月、現庁舎がお目見えした。その後、市立図書館や市民文化会館などが建設され、このエリアは常滑市の行政文化の中心となった。

新開町に建設される以前、常滑市役所は現在の本町二丁目にあった。そこは本町商店街のほぼ中央で、前身の知多郡常滑町時代からの役場所在地である。昔ながら、市街地のど真ん中に庁舎があることは市民にとって便利だったであろう。しかし、合併によりカバーする面積が大きくなり、人口も増加の一途を辿る市の庁舎としてはあまりにも手狭だし、アクセスもよくない。そこで、広い敷地を容易に確保できる埋め立て地への移転が決まったのである。

現庁舎の建設が議会で決定したのは昭和42年(1967)6月で、着工はその年の12月。工事が始まる直前の広報とこなめにその概要が紹介されている。

新しく建設される市庁舎の規模は主要次のとおりですが、鉄筋コンクリート4階建て一部5階延べ床面積約8700㎡の建物でその機能はあくまでも市民本位にして事務の効率化を最大のねらいとしております。設計は昨年度市民体育会館を設計した三橋建築設計事務所が担当、わが国の市庁舎には例を見



脱皮

この大皿は昭和55年(1980)に作られたもので、先述の「月の椅子」に携わった若手を中心とした十九人の作家の共作だ。そもそもは、全国モーターボート競走会連合会会長の笹川良一が「国連本部に寄贈したい」と制作依頼したもの。前例のない大皿であるため制作には苦勞し、常滑市立陶芸研究所所長だった沢田由治の指導のもと、なんと三枚を完成させ

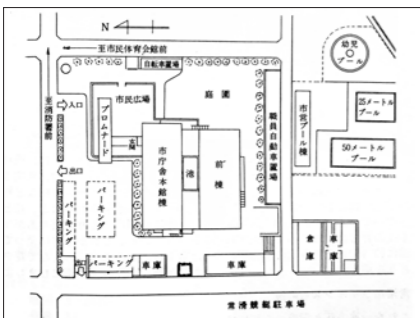
贈したものと。北面の歩道沿いには、市制六十周年記念事業として平成26年(2014)に市民参加で制作された「とこなめ未来絵プロジェクト」※3の立体タイルアートがずらり並んでおり、カラフルでユニークな造形が目を引く。さらに、駐車場入口には陶製のかわいい猫人形を載せた郵便ポスト、玄関には今もヨリコ造りで甕を作る職人前川賢吾さん※4作の大口径の土管風プランターもある。

館内に入ると開放的な吹き抜けのロビーがあり、その一角で三つの展示品が来庁者を出迎えてくれる。一つは三代山田常山の作品。常山は平成10年(1998)、愛知県初の人間国宝(重要無形文化財保持者)に認定された常滑焼急須の大家で、ここには朱泥・自然釉・紫泥の三作品が展示されている。もう一つは、昭和43年(1968)から平成28年(2016)まで開催されていた長三賞陶芸展の大賞受賞作品。そして、表紙の大皿である。

一枚は依頼者に納品、二枚は市に寄贈され、市庁舎と競艇場に設置された。当時の市職員によると、見事な出来栄えに喜んだ笹川良一は、大皿に寝そべってみせたそうである。

吹き抜けの階段を登って二階に上がると「市民ギャラリー」と名付けられた展示スペースがあり、常滑陶芸作家協会会員の作品が展示されている。それとは別に、作品を取めたガラスケースが、二階ロビーから食堂にかけての通路に三か所。その通路の窓から下を見ると、陶製ブロック、植木鉢、プランター、焼酎瓶、置物など陶製品で構成した不思議なデザインの中庭がある(P.04-05写真)。ちなみにここは、開館当初は池だった。反対側には土管や電線管理施設ケール保護用の土管の一種)や甕を配した庭もあり、どちらにも遊び心にあふれている。

作品ではないが、庁舎内の壁を覆う落ち着いた風合いのタイルブロックも印象



オープン当時の見取り図(広報とこなめ 昭和42年12月号より)



市民広場と庭園があった頃の市庁舎(写真提供:とこなめ陶の森)



「大皿」の制作風景。中央が沢田由治(写真提供:とこなめ陶の森)

一般的来庁者が三階より上に行くことはあまりないと思うが、実は上部フロアにもなかなか見えた作品がある。いずれも陶壁で、エレベーターに乗って各階の扉が開くと、迫力ある壁面が突然目に飛び込んでくるという趣向になっている。

市長室のある三階は、急須の蓋を思わせる大きな円盤が壁面に二百枚ほど貼り付けられたモダンなデザインの作品。作者は「月の椅子」にも参加した画家の稲

庁舎を飾る陶壁の存在感



稲葉実による三階の陶壁

階段壁面のタイルブロック



松下衍の龍巻大甕

「とこなめ未来絵プロジェクト」の作品

市民ギャラリー

時は昭和44年、躍進する常滑市の象徴たる庁舎が誕生した。

ない市民広場、あるいはゆったりとした市民ホール、多くの会議室、さらに間仕切りのない大部屋システムの事務室など従来の市役所のイメージを破った新しい感覚をもった建物であり、洋々たる常滑市の前途を象徴するにふさわしい庁舎であります。

(広報とこなめ 昭和42年12月号/第100号より)

文中にもあるように、設計は三橋建築設計事務所(現三橋設計)。全国の公共系建築を数多く手掛けてきた業者で、常滑市では市役所と市民体育会館のほか市立図書館も設計している。また、施工は大手建設会社の西松建設である。

この一文によると、現状とは少し様子が異なるようだ。現在の建物は五階建てだが、ここには「鉄筋コンクリート四階建て」とある。実際には、議会の傍聴席部分が屋上に突き出た形の「部分的な五階建て」だった。のちに五階が全面増築されて、今のようなフル五階建てになっている。

また「他の市庁舎に例を見ない市民広場」とは、庁舎の北東角、玄関の脇に設けられたタイル敷きの前庭のこと。来庁者や職員のための憩いの場となっていたようで、座って一息つけるよう陶製の椅子がいくつか置かれていた。これは、昭和45年(1970)の大阪万博のとき、会場に設置するために常滑の若手陶芸家グループが共同で大量に制作した「月の椅子」の一部※1。実際に万博会場で使わ

れたち常滑に返却され、市民への披露の意味も込めて、何点かを開館間もない庁舎に置いたのであろう。

市民広場には玄関への導入路として屋根付きの「プロムナード」も取り付けられ、さらに市民広場の南側には芝生の庭園も作られた。土地にゆとりがあったためか、庁舎まわりのデザインがゆつたりしていたようである。なお、市民広場はりんくうエリアの開発による庁舎北側の道路拡幅に伴ない庭園とともに撤去され、現在は駐車場になっている。

「ここはまるで常滑焼ギャラリー」

その「月の椅子」は市民広場の撤去とともに市内の別の場所に移設されたが、庁舎の内外には今なお数多くの常滑焼を見ることが出来る。庁舎そのものがちよつとしたギャラリーの様相だ。

まず建物の外まわりから見てみよう。敷地の北東角の植え込みの中に「常滑市役所」と刻まれた重厚な標石があり、その傍らに大きな龍巻の甕が一つ置かれている。これは、大物の製造法「ヨリコ造り」の技能保持者として市の無形文化財に指定されていた松下衍※2の手によるもので、一對の龍の真ん中に「常滑市」の文字があらわられたオフィシャル感のある一品だ。背面に昭和53年(1978)の制作年が記されており、この年に常滑市長賞を受賞したのを記念して寄

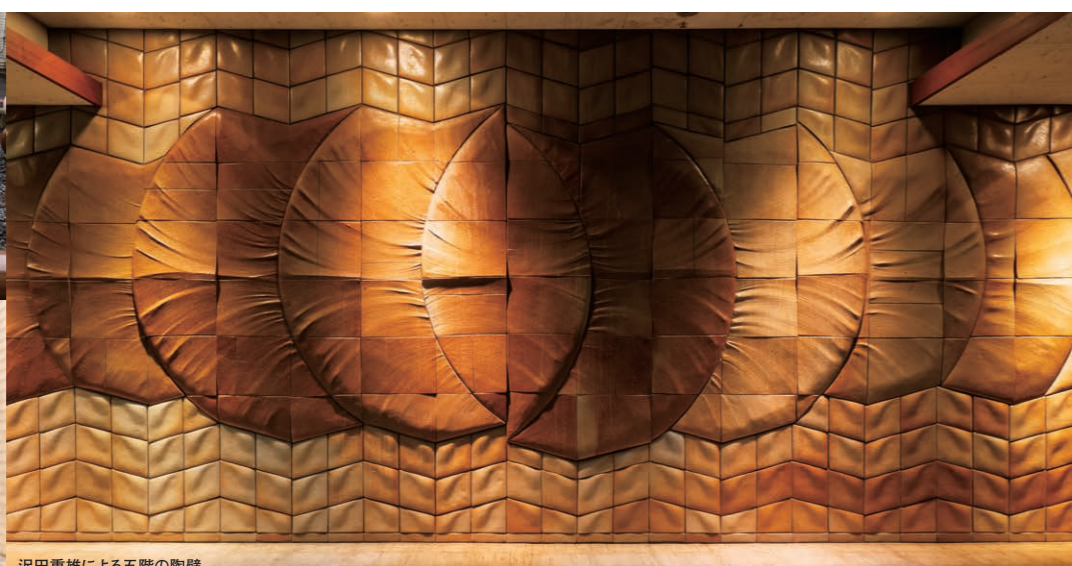


二階屋外庭のオブジェ



07 COCONUTS CLUB

陶製のドアノブ



沢田重雄による五階の陶壁

ありがとう現庁舎、これからよろしく新庁舎！

### 新年のご挨拶

新型コロナウイルス感染症の影響拡大を憂い、お見舞い申し上げますとともに、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

日頃は弊社のサービスをご利用いただき、心から御礼を申し上げます。

本年も社員一同、皆様にご満足いただけるサービスを心がけてまいりますので、何とぞ倍旧のご愛顧を賜われますようお願い致します。

さて、昨年はかねてから南知多町よりご要望のあった日間賀島、篠島へ弊社の光回線サービス「ちった光」を導入いたしました。

光回線による通信環境の大幅な改善により、両島にお住いの皆様の暮らしを豊かにするとともに、知多半島全域の観光振興にも貢献してまいります。

また、今年は弊社開局から30周年となる節目の年です。これもひとえに地域の皆様のご支援とご厚誼の賜物と深く感謝しお礼申し上げます。

ささやかではございますが、長年ご愛顧いただいた皆様へ、感謝の気持ちをお伝えする様々な企画を準備しております。是非ご期待ください。

終わりになりますが、新しい年が皆様にとって最高な年でありますよう、新型コロナウイルス感染症の終息を願うとともに、

皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

知多半島ケーブルネットワーク株式会社  
代表取締役社長 中西 満



## ココナッツ 街ネタ通信

今月の  
質問

Q. あなたのおすすめの  
お取り寄せグルメとその理由について教えてください。

ココテラス、たまごプリン。他のプリンにないおいしいところがいづも喜ばれます。(30代・女性)

地元の恵みをお土産としても味わってもらえるので、私も好きです。次はぜひレシビアでミルクセーキを飲んでみてください。お勧めです。(鈴村)

びざドキさんのピザ。安くて美味しいです。(40代・女性)

我が家でも大人気です。ただ、なかなか新メニューには冒険できない…。(竹内)

六花亭。バターサンドやキャラメル、ストロベリーホワイトチョコなど、どえらいうまい。家族みんな大好きだから。(50代・女性)

おいしいですよ、バターサンド!!ただ、食べるときはカロリーを見ないようにしています。(竹内)

徳吉醸造さんの千賀みそ。徳吉醸造さんは海の近くにあり、海になじんだ麹菌が蔵に住みついているのだと思われるせいか、この蔵のみそやたまり、しょうゆは魚料理にとても合う気がします。(50代・男性)

私も同感で、武豊の味噌蔵とはまた違った、より魚に馴染む味と思っています。これからの時期は焼き味噌に合う「師崎みそ」もお勧め!お好みの野菜や魚などを入れてじゅうじゅう、どうぞ!(鈴村)

愛知県知多半島の農産、魚介類。地産地消、新鮮で美味しいです。(80代・男性)

おっしゃる通り、地元は美味しいものがいっぱいですね。今月号10Pでは、知多半島グルメをお取り寄せできる「ちたまるショッピング」を紹介しているのでぜひご覧ください、ご利用ください!(藤本)

京都のグランマーブルの「マーブルデニッシュ」です。一度食べたらその風味にはまりました。「京都三色」がおすすめです。(70代・男性)

私もそのマーブルデニッシュ、大好きです!!「京都三色」は抹茶とプレーンと苺の生地が織り交ざり、味だけでなく目にもおいしいのが良いですよ。(藤本)

### CCNCからのお返事は、私たちが担当しました! 街ネタの質問「あなたのおすすめのお取り寄せグルメとその理由。」



藤本 江美

真空パックになった尾頭付き鯛の塩焼きです。長女のお食い初め時、自分で鯛を焼くのに失敗して以降、長男、次女の時にはお取り寄せしました。めでたい席に美味しいものがあると幸せですね。



竹内 啓真

すっぱいものが好きな私は、広島島の「レモスコ」をおすすめします。レモンのタバスコ「レモスコ」は、広島ではお好み焼にかかけたりするんですよ!!



鈴村 悠

昔、新聞記者さんから魅力を聞いて以来、スープカレーが好きです。中でも本場北海道の「木多郎」のチキンカレーは、ごろっと入ったチキンや野菜がスパイシーなスープと相まって、寒い時期に身体の芯から温まる極上の味わいです。

葉実で、円盤とバックの黒い陶板の制作は兼又陶園。四階は窯の中で暴れ踊る炎のような豪快な作品。これは、当時の兼又陶園代表の長男で、のちに「陶房杉」を開く杉江淳平によるもので、「窯華」という題がついている。杉江淳平は陶壁の第一人者。この作品がきっかけとなって陶壁制作に本腰を入れるようになり、以後、全国各地に作品が設置されていった。映画「泣きたい私は猫をかぶる」にも登場した登窯広場の「輝」も杉江淳平の作品だ。後年増築された五階は沢田重雄の作品。四階とは対照的なやわらかさを感じさせ、布にも見える繊細な凹凸が心地よい。近年建てられる公共建築で、このような陶壁が使われる例にはあまりお目にかからない。しかし、そこは数々の陶壁の名作を生み出してきた常滑市。新庁舎の二階には陶壁を飾る予定になっている。また、立体駐車場と庁舎をつなぐ歩行者デッキの壁面には、スクラッチタイル(黄色い煉瓦)とセラコッタも設置されるというから楽しみだ。この取り組みは「甕れ!!『黄色い煉瓦』〜みんなで作る新庁舎〜」と銘打ち、タイル制作は市民が参加して行われる。常滑らしさにあふれた現庁舎と同様に、新庁舎も市の顔にふさわしい建築になるだろう。



新庁舎に使用されるスクラッチタイルの見本

※12016年7月号「月の椅子」を探して参照  
※22019年12月号「やまの散歩道M」を参照  
※32016年8月号「常滑焼が可を飾る」参照  
※42019年11月号「甕を作る職人」参照  
※52020年10月号「常滑と異世界のあいだ」参照  
(取材協力)常滑市総務課・常滑市施設マネジメント課 / (ごまめ陶の森) (参考文献)常滑市誌 / 広報とこなめ名号